

遊 び 体 育 か ら

村 田 修 子



人というものは考えてみますととても身勝手なものです。冬になつた、となりますと、普段は「寒いく、早く暖かくなつてほしい草の芽が早くみたいものだ」等と冬をきらうのですが、一たんスキーにでもいこうとなりますと、山に雪がたくさんあることを願つたり、重い荷物を背負つてこみ合う汽車にゆれながら遠い所まで出かけていってすべつたりころがつたりして、「何と冬はよいものか」と冬をほめたたえるようになります。

こうして大人の世界を考えてみますと、人は生活をするために仕事をし、これが集つて社会を構成しているのです。仕事をし、労働をするということと、遊び(レクリエーション)がはつきりと区別出来るのです。勿論大昔の大人たちは、狐をしたり魚をとつたりすることが生産でもあり又一つの楽しみでもあつて区別することは出来ないものでしたが、文明がすすんできて仕事の技術が高度になつて分業化されてきてからレクリエーションということがはつきりしてきました。

これを子供の世界についてみますと、遊びと仕事ということを区

別することは出来ません。指導要録には「仕事の習慣」等と区分されてはいますが、この仕事というのは大変狭い意味のものとみることが出来ます。子供の生活を考えてみたとき、すべてが遊びの中に包含されていると思ひます。その中で、鬼ごつことかブランコ等のよるな本當の遊びの性格をもつたものと、書いたり、切つたり、作つたりする作業的な性格をもっているものとありますが、これも純然たる仕事とはいへ、きれずどこまでも幼稚園の生活の流れの中の一小部分にすぎないものであると思ひます。つまり子供というのは興味とかこうしたいという気持からおこつてくる子供みづからの活動、すなわち広いみでのあそびが中心になり、この遊びの中から自然におこつてくる欲求にもとづいて展開されていく生活中心の保育計画によることが望ましい形なのではないかと思ひます。

ところが最近の保育界においては小学校等と同じように教科課程の研究が進められ、それが熱心のあまり幼稚園本来の姿をとりこしてゆきすぎのようになつたり、一つの模範的表を作ることが立派なことであるとするような傾向になつてきて、今度はこういうもの

に対する批判というものが各方面で論議されています。これが体育の世界のたどってきたみちと共通点を見出すことが出来るので、日本体育の歴史から教材を中心にしてあげてみたいと思います。

○教材を中心にしてみた日本の体育の変遷

学制が出来た明治時代は体育の部面においても一般の傾向と同じように外国のその輸入であったために、その時代主におこなわれた普通体操・兵式体操もその匂いが強いものでした。

その後大正の始め國家が体育のカリキュラムを作り、それが戦争中までずっとつづいていました。その間今までのように普通体操・兵式体操ばかりでなく、生理学、解剖学に基づいたスエーデン体操が入ったり、更に競技運動が加えられたりしました。

昭和十一年要目（今でいう体育カリキュラム）の改正が行われました。その改正では、根本の問題をかえるというよりも、体育の方法やりが児童生徒の個人の要求にもつづいた体育指導法になりました。このためにここで扱われる教材は遊戯化されました。教材が中心になる教育から、中心を子供においた教育にかわってきたという事は、これがどの程度行われたかということはさておいたとしても大変進歩したことです。

これが戦争中に武道鍛錬中心の教材にかわってきたのです。私が学生時代にも要目改正という言葉がきかされ、その研究材料となったことを思い出します。このとき出された要目というものは、目標・指針・方法・進度・実施上の注意等々実に細かいところまで規定されていて、そういうものをみれば一切が分る、という先生の虎の巻とでもいうようなものでした。ただこれによってこれを遵奉して

生徒に伝達すれば事すむといった大変重宝なものでした。

勿論それをもって指導するためには子供というものを心理的の方面・身体的の方面からもよく知り、子供たちのもつ欲求をみだし自発性をのばすようにし更に子供たちの生活している環境を考えて、これらを基盤としてそれにありように指導していくわけなのですが、それでいて「要目の内容に対して自由な変化を加えてよいというみではない……」と規定されていました。

昭和十七年更に子供の心身の発達程度に応ずる、ということや、子供の属する環境ということを含めてよりも強く考え、これと日本の国情に合った訓練という方向になってしましました。そして自然的・総合的に取扱って生活に適するよう指導するようになり、こゝで生活中心のカリキュラムに発達してきました。そこで当然衛生面ということが取り上げられ日常の健康生活に必要な衛生訓練ということが進出してきました。勿論この時代は戦争中でしたから、そこで行われた生活体育の性格としてそういう匂いをもったものであったことは当然のことですが……。

このように昭和十七年のカリキュラムが生活体育のカリキュラムの性格を十分もっていたのですが、ただこれが最高権威者が集った委員会によって作られたことや、実行を強制し他にカリキュラムの構成を許さなかったために、ただこれを実行すればよいということになって体裁としてはとても立派なものなのですが、実際面においては生活の具体性というものがあらわれませんでした。又これは余りに整ったものであったために、指導者は色々の基盤となるものを研究することなしに、その方法だけをままるのみにするという

ことになってきました。

幼稚園のカリキュラムの沿革がやはりこのような道をたどってきたようですが、立派なものが出来てしまつて、これでよしとしてこれを用いるときにやはり注意しなければならぬことが同じようにおこつてくると思います。

このように幼稚園生活全体のカリキュラムが出来て次に小学校でいう教科的なそれぞれについてのそれが考えられてきました。

そこで幼児の体育について考えてみました。ところが音楽などについては一応それらしいことが考えられるのです。例えば、音に合わせて拍手することが出来るようにする、とか音の高い低いが分るとか強い音弱い音の区別が出来る等々、けれども体育については何か出来るように考えていると取上げべき体育の範圍とするものもやもやとしてきてしまうのです。それほど遊びと混然ととけ合つてゐるのです。

そしてともと体育というものは、殆んど意見にもとづいてカリキュラムがなりたつてゐるもので、適切な実験によつて得た科学的な証拠や、実験が少ないので最もよいと思われる思考によつてそのプログラムが作られてゐるのです。ですからこのような混然とした形の中からとり出すことはよけいにやさしいやうでむづかしいことです。その上、音楽的なことについて考えてみますと、赤ん坊の時から音のするものを叩いたり、歌をうたつたりといふことは自然にします。けれどもその先のことについてみますと音楽のもつ分野では規則だて、教えるという要素を多分にもつてゐます。ところが幼稚園で考えられる体育の分野では、歩くこと、走ること、ピョンピ

ョンとぶこと、すべり台にのること等々、そういう基本になるものは手をとつて一つ一つ教えるというよりも子供自らが自然のうちに見たり経験したりして、実際にこなししていくという形をとるもので、よけいにはつきりとしなくなつてしまひます。

アメリカの上から下までの体育カリキュラムを作つたアーウィンという人も、「幼児では、やってみようという気になつていない器具で何かをするように要求してはならない……」と述べているように、低鉄棒では何と何の動作が出来なくてはとかいいうやうな、いわゆる幼児体育カリキュラムというものを細かくあげることが無理なことだと思ひます。ただここで先生が常に心掛けていなければならぬことがあります。それはそういうものに接する機会を今迄もたなかつたり、少しも関心をもたない人達に対するとき、機会を作るやうにしたり、子供を元気づけてやり、必要があれば援助してやるやうに先生もそれに加わつてその個人に應じた適切な指導をする心掛が大切であり根本になると思ひます。

その反面私のような体育の畑でぞつたものは、一応細かいところまで考えてみなくてははいけない、と思ひますが、幼児のいわゆる「遊び体育」（私はこう呼びます）からはまだまだつかまえるところがない、というのが本音なのです。ただ私は機会を多くもたせてやることによつて、熟練度を増すことよりも、子供相応の関心をもたせ、それが下地となつて進展した生活が豊かになつていくことを願つてゐます。

（お茶の水女子大学附属幼稚園教諭）